

症例報告

言語訓練が有効であった意味性認知症の一症例

長岡中央総合病院、リハビリテーション科；言語聴覚士<sup>1)</sup>、神経内科；神経内科医<sup>2)</sup>

木村良太郎<sup>1)</sup>、大熊由貴子<sup>1)</sup>、小原 愛美<sup>1)</sup>、目黒 文<sup>1)</sup>、大野 司<sup>2)</sup>

背景：近年、認知症の臨床においては、病態解明や病型分類が急速に進み、注目を集めている。前頭側頭葉変性症は前頭側頭型認知症と進行性非流暢性失語および意味性認知症に分類され、後者は失語症が初発症状となるため、言語聴覚士による積極的な支援が期待されている。本報告では、約1年半関わった症例を通して、言語訓練の効果と意義について考察した。

症例内容：Aさん・66歳・女性・中学卒の主婦で右利き。平成24年初めより名詞を思い出せなくなり、同年3月に当院神経内科を受診。精査目的で言語聴覚士の介入となった。MRIでは左側頭葉前部部の著明な萎縮を認めた。言語所見では、喚語障害および語義理解障害を中核とする進行性語義失語の病像を呈しているのに対し、認知機能は保たれており、意味性認知症と判断した。Aさんは自己の症状に対する自覚があり、不安を訴えたが、夫は苛立ちながら叱咤することが多かった。訓練前半には、既存の一般的な失語症の訓練教材を用いたが、日常生活への般化はみられず、不安が増大した。訓練後半では、オーダーメイドの写真カードを用いた単語再獲得訓練に変更し、教材作成では夫に訓練協力を求めた。最終的には96語の呼称が可能となり、日常会話への般化もみられた。さらに、夫が教材作成や自主訓練に参加したことでAさんの症状が理解され、心理的安定がみられた。

結論：初期のSD症例における単語再獲得訓練では、方法および内容を適切に選択することで一定の効果が得られ、日常生活にも般化する可能性が示唆された。また、患者が心理的に安定した生活を送るためには、家族の症状理解が促進されるような訓練プログラムの立案や病期に応じた情報提供、環境調整などの支援が非常に重要であると再認識する機会となった。

キーワード：前頭側頭葉変性症 (Frontotemporal lobar degeneration, FTL)、意味性認知症 (Semantic dementia, SD)、言語訓練、単語再獲得訓練、家族支援、言語聴覚士 (Speech-Language-Hearing Therapist, ST)

背 景

近年、認知症者数は増加傾向にあり、2012年の厚生労働省調査では400万人を突破したことが報告され

た。介護負担増加や支援者不足が大きな社会問題となる一方で、臨床においてはアルツハイマー病 (Alzheimer's disease: AD) やレビー小体型認知症 (Dementia with lewy body: DLB) に加えて、比較的新しい概念である前頭側頭葉変性症 (Frontotemporal lobar degeneration: FTL)、原発性進行性失語 (Primary progressive aphasia: PPA) の病態解明や病型分類が急速に進み、注目を集めている。FTLは異常行動・人格変化が先行する前頭側頭型認知症 (Fronto-temporal dementia: FTD) と言語症状が先行する進行性非流暢性失語 (Progressive non-fluent aphasia: PNFA) および意味性認知症 (Semantic dementia: SD) に分類される。PNFAでは、発話時の助詞の脱落や文法の粗略化を意味する失文法と、音声発話運動に関わる変動を伴う構音の歪み、努力性発話をもたらす失構音 (anarthria または発語失行) を中核症状として、統語的に複雑な文の理解障害もみられる。SDでは、発話運動や文法が保たれながら、喚語困難と語の意味 (語義) 理解障害を中核症状とする語義失語がみられる。さらに低頻語ないし低親密度語の対象物に関する知識の障害、読みと綴り字の規則性に音読が左右される表層失読ないし失書も認められる。病初期には語義障害にとどまるが、進行に伴って、相貌、物品、環境音などあらゆる感覚様式からの同定障害という意味記憶障害に移行する(1、2)。PNFA および SD では、失語症が初発症状となるため、言語聴覚士 (Speech-Language-Hearing Therapist: ST) による積極的な支援が期待されている(3)。本報告では、STとして約1年半関わったSD症例を通して、言語訓練の効果と意義について考察した。

症 例 内 容

【症例】

Aさん・66歳・女性・中学卒の主婦で右利き。ADL自立。家庭では、炊事以外の家事を担当しており、夫と一緒に畑仕事も行っている。平成24年初めより固有名詞、一般名詞が思い出せなくなり、同年3月に当院神経内科を受診。精査目的でST介入となった。MRIでは、左海馬を含む側頭葉前部部の萎縮が著明で、下頭頂小葉にも軽度の萎縮を認めた。SPECTでは、同部位の血流低下を認めた(図1)。

自由会話では、礼節は保たれており、疎通性は良好だった。発話は流暢でやや多弁傾向で、簡単な会話は可能だが、喚語困難や語性錯語、迂言を認めた。標準失語症検査(図2)は、理解面では口頭命令および書字命令の文中で語義の一部(万年筆、手前など)が理解困難であった。表出面では、呼称、語列挙、漢字単

語の書称・書き取りでの成績低下が目立った。口頭表出では自由会話場面と同様な誤りの傾向があり、書字では漢字の想起困難、錯書がみられた。また、語頭音効果が乏しく、語の再認障害を認めた。数週間前の出来事の再生が可能であり、エピソード記憶は良好であった。Kohs立方体組み合わせ検査ではIQ81であった。画像所見に加えて、認知機能は保持されているが進行性語義失語を呈していることから、軽～中等度に移行中のSDと判断した。Aさんは自己の症状に対する自覚があり、「忘れん坊になってダメだ」と何度も訴えた。これに対して夫は、Aさんの症状に対する理解が不十分な様子があり、苛立ちながら叱咤する場面がみられた。

評価内容より語義障害に起因する喚語障害、理解障害、書字障害および家族に理解不足を主問題点と考え、言語機能の維持、残存機能の活用、家族指導を目標に訓練を開始した。

#### 【訓練Ⅰ期：平成24年4月～10月】

訓練初期には絵の書称、条件文からの語想起、語列挙など既存の失語症の訓練教材を用いた。Aさんの課題への取り組みは熱心であった。しかし、教材の変更を頻回に行い、内容も様々なカテゴリーに広げたために、「課題プリントの絵を見た際にはある程度呼称できるが、場面や絵が変わると喚語障害が頻発する」という状態が続き、日常生活への般化はみられなかった。これに対して、「練習しても言えない、どんどん忘れる」というAさんの訴えが増強した。

#### 【訓練Ⅱ期：平成25年11月～】

Aさんの心理状態を考慮して、中期（訓練開始後7ヶ月）以降には写真カードを用いた単語再獲得訓練を実施した。一美ら(4)の先行研究を参考とし、日常生活で実際に使用している物品のカード(図3)を作成した。Aさんに合わせたオーダーメイドのカード作成に際しては、夫に訓練協力者として参加を求め、物品をデジタルカメラで撮影してもらった。自主訓練として、写真(表面)の呼称または書き取りを行い、分からない場合には文字(裏面)の音読または写字するように設定した。また、頻度や量の指定はしないが、毎日休まずに行うことを約束した。当初、呼称可能な単語数は50語中13語であったが、2ヵ月後には50語となった(図4)。Aさんの熱心な取り組みは変わらず、絵カードを持って家の中を回り、実際の物品を呼称することも自主的に行っている様子であった。経過の中で絵カードを漸増したが、最終的には96語の呼称が可能となり、現在も維持されている。夫には、「訓練を行っても言葉が完全に戻るわけではないが、機能を維持・向上して少しでも日常生活で使えることばを増やす」、「出来なくなったことだけではなく、出来ていることや保たれていることにも目を向けていく」との内容を家族指導として説明した。訓練方法の変更後は、「まだ言えない言葉も多いけど、練習したものは家族との会話に使えた」との発言があり、訓練語が日常会話への般化したものと考えられた。また、夫も訓練協力者としての関わりを通して、Aさんの症状に対する理解が深まり、「頑張った言葉は言えるようになったな」、「言えないのは次に頑張ればいじゃないか」、「畑の仕事はいつも頑張ってくれている」などの励ましの言葉や受容的な対応が増加した。単語の再獲得および

日常生活への般化に加え、夫の対応が変化したことでAさんの心理面は徐々に安定した。

#### 【現在の状況】

一般的な言語機能は緩やかに低下傾向であり、家庭生活に著しい影響を及ぼすほどではないが、性格の尖鋭化や常同行動などの前頭葉症状も徐々に出現している。その反面、自主訓練を継続している単語は維持され、Aさんの心理面も比較的落ち着いた状態が続いている。当院での訓練内容としては、単語のチェックを行いながら、夫からも家庭での様子を聴取している。また、Aさんの生活史を振り返りながら、今まで果たしてきた役割を肯定的にフィードバックするような自由会話を行っている。

## 考 察

本症例では中盤以降の訓練方法変更によって、96語の単語再獲得が可能となった。SD症例の単語再獲得訓練において良好な成績を得る要因として、一美らは①元々の呼称障害が軽度であること、②自己の言語障害に自覚があること、③訓練意欲が高いこと、④エピソード記憶や言語以外の認知機能が十分に保たれており、言語面を補う代償手段が働くこと、などを挙げている(4)。本症例もその条件と一致する点が多く、直接的言語訓練の適応があり、一定の効果が得られたと考える。また、教材の選択に際しては、語の範疇化の問題から実際に家庭で使用している日用品を選択することが望ましいとされている。本症例でも、訓練方法を変更して、教材をオーダーメイドにしたことで生活に必要な単語の再獲得および会話への般化が可能になったと考える。

また、訓練に際しては、対象者への直接的な関わりと同時に家族支援も重要となる。三村は、「患者に対する介護者の態度や構えが変わるだけで、患者自身の問題行動が減り、介護者にもゆとりが生まれて、介護負担が軽減してくることは珍しくない」として、家族が認知症者の問題点や症状を十分に理解した上で生活することの重要性を強調している(5)。本症例においても、夫に症状の説明を行うだけでなく、教材作成や自主訓練など実際の場面における訓練協力者として位置づけたことでAさんの症状が理解され、受容的対応の増加が心理面の安定に繋がったと考える。

現在、訓練効果は維持されているが、今後は原疾患の進行によって、更なる認知機能低下や周辺症状の出現が予想される。住み慣れた家庭で少しでも長く生活していくためには、訓練の継続のみならず、家族指導や関係機関との連携などの病期に応じた継続的支援が課題となる。

## 結 語

先行研究および自験例を通して、初期のSD症例における単語再獲得訓練では、方法および内容を適切に選択することで一定の効果が得られ、日常生活にも般化する可能性が示唆された。また、患者が心理的に安定した生活を送るためには、家族の症状理解が促進されるような訓練プログラムの立案や病期に応じた情報

提供、環境調整などの支援が非常に重要であると再認識する機会となった。

## 文 献

1. 小森憲治郎. Semantic Dementia と語義失語. 高次脳機能研究29(3) : 328-36, 2009.
2. 小森憲治郎. 原発性進行性失語 : その症候と課題. 高次脳機能研究32(3) : 393-404, 2012.
3. 池田学. 前頭側頭型認知症 (FTD) の診断と治療. SPRINGMIND no.10 (小野薬品工業株式会社発行) : 2-5, 2012.
4. 一美奈緒子, 橋本衛, 小松優子, 池田学. 意味性認知症における言語訓練の意義. 高次脳機能研究32(3) : 417-25, 2012.
5. 三村將. エビデンスのある認知症の非薬物療法. 高次脳機能研究32(3) : 454-60, 2012.

## 英 文 抄 録

### Case report

A case of semantic dementia (SD) treated by language training

Nagaoka Central General Hospital, Department of rehabilitation; speech-language-hearing therapist (ST)<sup>1</sup>, Neurology; neurologist<sup>2</sup>  
Ryoutarou Kimura, Yukiko Ohkuma, Aimi Obara, Aya Meguro<sup>1</sup>, Tukasa Ohno<sup>2</sup>

Background : Aphasia is presenting symptoms among patients of semantic dementia (SD) in fronto-tempo-

ral lobar degeneration (FTLD), who require the active support by speech-language-hearing therapist (ST). In this report, we disclosed the significance of the language training during one and a half years.

Case : The case was a 66 y/o right-handed housewife of the junior high school graduate. She could not remember any nouns from 2012 and visited our neurology in March. ST intervened her language problems. There was a significant atrophy of the anterior area in left temporal lobe in the magnetic resonance imaging study. Progressive meaning aphasia suggested SD. Though she had anxiety for aphasia, her husband often scolded her with irritation. We used the usual aphasic training method for the first half period, but failed to adequate improvement. During the latter half the word reacquisition training was done with using photograph cards, made by her husband, and she could get 96 names for daily life conversation. Her husband participating in making teaching materials and voluntary training, she could be understood by him and get the psychological stability.

Conclusion : In the word reacquisition training in the SD cases, it is important that we choose the appropriate contents. Also, it is more important that the family members can understand the symptom of the patient by the informed-consent and the environmental supports.

Key words : fronto-temporal lobar degeneration (FTLD), semantic dementia (SD), language training, word reacquisition training, family support, speech-language-hearing therapist (ST)

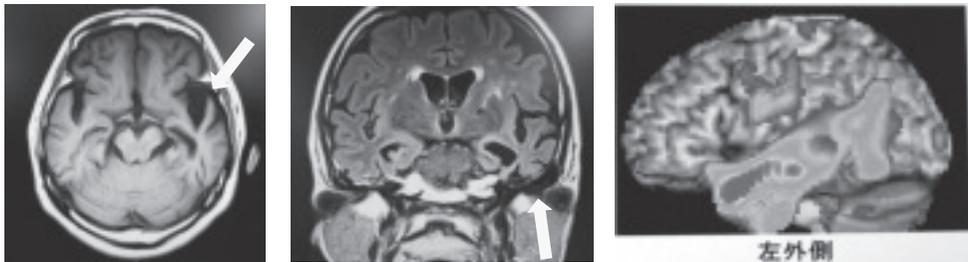


図 1. MRI・SPECT 画像所見

左図、中央図 (MRI) : 海馬を含む左側頭葉の前方部の萎縮が著明  
右図 (SPECT) : 左側頭葉前方部の血流低下が著明

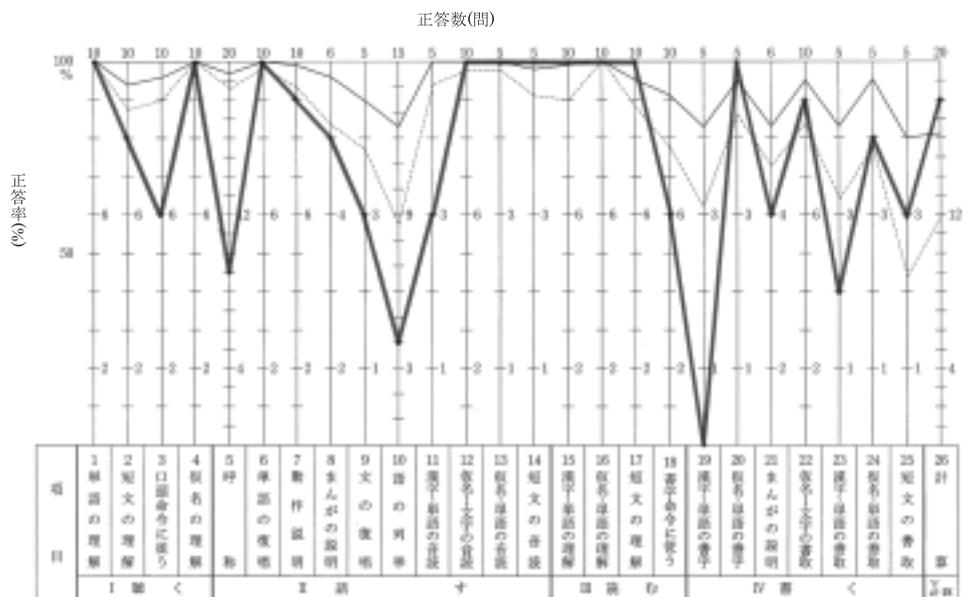


図2. 標準失語症検査プロフィール



図3. オーダーメイドの写真カード  
 表面：夫が撮影した日常生活で使用している物品  
 裏面：漢字、仮名文字を記載

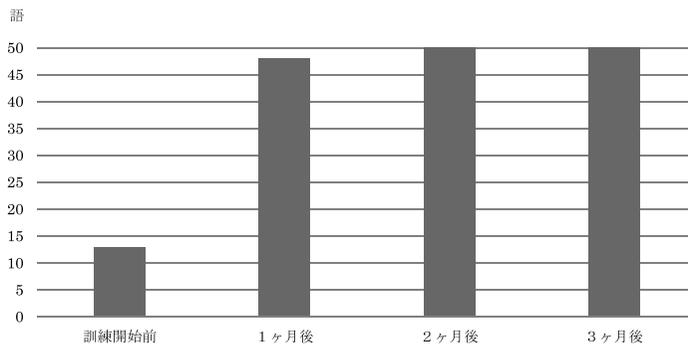


図4. 呼称可能単語数 (50語までの経過)  
 その後、96語まで獲得

(2013/12/16受付)